KWAN

名古屋大学大学院環境学研究科

バングラデシュ･ポストカムリ村の壷造り（2004.8.30、撮影:溝口常俊）

March, 2006
12号

目　次

壺造りカーストの日常　― 生業と通婚 ―
溝口常俊 ―――――――――――――――――――― 3

『環境学研究ソースブック』ができるまで
高橋　誠 ―――――――――――――――――――― 10

KWAN「環」創刊後の 4 年間を顧みて
「変わりゆくエリート教員文化」のなかで
大川睦夫 ―――――――――――――――――――― 16

退職にあたって〈阪神淡路大震災の衝撃〉
藤井直之 ―――――――――――――――――――― 26

「相生山の自然を守る会」が教えてくれた事
『KWAN環』11 号掲載の大川教授執筆エセイに対して
小川千絵子 ―――――――――――――――――― 29

事務部の窓
―――――――――――――――――――――― 32

【表紙写真説明】

ヒンドゥーの女性は実によく働く。壺造り村の女性達も例外ではない。屋敷地の庭で朝から晩まで炊事・洗濯・子守の合間は壺造りをしている。

壺造りカーストの日常　― 生業と通婚 ―

溝口常俊　社会環境学専攻　地理学講座

壺造りカーストの生業

ムスリムの国でマイノリティのヒンドゥーは如何に生活しているのだろうか。2004年夏8、9月、雨期の真っ最中にバングラデシュを訪ね、ヒンドゥーの壺造り（パル）の村に入って、全世帯の家族構成、職業、既婚女性の出身地と嫁ぎ先などを聞き取ってきた。中庭での壺造り、神像造りに精を出すパルをみて、「壺造りは乾期にしか仕事ができなく、雨期には農作業をする」（『社会人類学』東京大学出版会、1987、193頁）という中根千枝説はいきなり否定され、また、お金がないから「土葬」なのよ、という一言でヒンドゥーは「火葬」と信じ切っていた常識が崩されてしまった。

バングラデシュにおいてヒンドゥーは少数であるが、ミルジャプール郡（首都ダッカから北西約60km）には比較的その数が多く、中でも郡都ミルジャプールとその周辺の村々に多い。ポストカムリ村にはパル、アンドラ村にはラズボンシ（漁師カースト）が多く生活している。その他ミルジャプール郡で採取できたカースト名はバラ

【写真1】壺造り村の庭（バングラデシュ、タンガイル県ミルジャプール郡ポストカムリ村にて2004.8.28筆者撮影、写真2～7も同村にて筆者撮影）

【写真2】壺造りの若奥さん（2004.8.30撮影）

モン（司祭）、カパリ（農業）、シル（床屋）、ゴーシュ（牧牛）、ストラダール（大工）など十数に及んだ。

【写真3】女神カーリー像（KWAN創刊号、P6、写真2参照）（1986.1.19撮影）

壺造りカーストは基本的に朝から晩まで壺造りに専念する。ジョムナ川デルタの粘土を仕入れ、土練りを行い、大車輪型のロクロを手動で廻し整形する。女性、老人たちも中庭で小型ロクロやヘラで各種の壺を作る（写真1，2）。雨が降り出したら露天干ししていた壺を小屋の中にしまい、止んだらまた庭に出す。雨期でも火入れは行い、焼成

【写真4】貯金箱を造る子ども達（2004.8.30撮影）

温度が低ければ黒い、高ければ赤い素焼きの壺ができあがる。できあがった壺は主人が定期市や個人宅に売りにでかける。壺の他に多様な土器を造る。ヒンドゥー教の神々（写真3）、燭台、井戸枠、トイレ枠、貯金箱（写真4）、子供用おもちゃ土器、ポップコーン（はぜ穀物）製造土器などである。特にヒンドゥー教の神像造りの家は作品を雨期空けのプジャ（礼拝）に間に合わせるべく製作に余念がなかった。

ところが、この壷造りというカースト固有の生業に最近大きな変化がみられるようになった。雑貨商、鍛冶職、お菓子売り、薬局勤めなどである。そんな中で最大の変化は海外出稼ぎ帰還者がサリーのプリント工場（写真5）を自宅の隣に建設したことである。この工場主は韓国への3年間の出稼ぎ後、その資金を元手に新事業に乗り出し、安定した職を提供するといった点で地元に貢献はしている。だだ、その一方で数十戸の壷造りの村でこの10年間にこうした工場が3戸も出来たことは、伝統的な壷造り業がやがては姿を消すのではと大いに心配されるところである。さらに、出稼ぎ者の多くが、帰国後、賃

【写真5】サリーのプリント工場（2004.9.3撮影）

金レートが格段に低いバングラデシュ社会へ就業復帰出来ず、ブラブラしている。彼らの頭の中は再度の出稼ぎしか無く、かといってその道は厳しく、そしてたとえうまくいったとしても、再び長期間家を空けることになり、行き着く先は家族崩壊となりかねない。この出稼ぎに関する問題は、単に壷造り村にとどまるものではなく、バングラデシュ全村にかかわる重要な問題である。

壺造りカーストの通婚

ヒンドゥーの結婚はそのカースト（ジャーティ）の枠にしばられて、異なったカーストとの通婚はタブーとされてきた。パルはパルとしか結婚できないのである。このカースト内婚という社会規範が一体どれほど守られているのだろうか。壺造りの村で悉皆調査した結果を以下に示してみよう。

ポストカムリ村の壺造りカースト全48家族において、嫁入り総数61人中58人が同じ壺造りカーストの出身であった。かなりの高率である。しかし、3人の嫁が他のカースト（2人はコルモカール：鍛冶職、1人はボニック：雑貨商）から嫁いで来ていたことは、カーストの壁は完

壁ではなかったという意味で大いに注目しておきたい。

さて、嫁を同じカーストから選ばねばならないとすると、相手を捜すのは至難のわざとなり、勢い通婚圏は広くなる。61人中、村内婚はわずか3人に過ぎなく、ミルジャプール郡内の他村から40人、郡外からが18人で、郡外の内7名がダッカ、シルエット、ボグラなどかなり遠方から嫁いできていた。ムスリムに近距離圏内の通婚が多かったのと対照的であった。総じて、ヒンドゥー教徒は自分と同じカーストのおおよその居住地を知っており、その情報収集のネットワークは、冠婚葬祭ないしは職業上の交流を契機としつつ、思いの外広範囲にわたっていた。彼女たちには恋愛結婚はなく、相手は両親、親戚、なかでも父親が探すのがふつうである。父親は年頃の娘を持つと日頃から相手探しに努力しているようである。ある奥さんにこの村への嫁入り理由を聞いたら、父親がこの村の近くにある慈善病院に入院している知人の見舞いに来た際に、近くに壷造りの村があると知り、そこへ散歩がてら花婿捜しに来て、候補者をみつけたという。

ムスリムの女性に比べてはるかに開放的なヒンドゥーの花嫁達（女性一般）でさえ、その日常生活上の行動範囲はバリ（屋敷地）内に限られていたことは意外であった。食事作り、子育て、壺造り、そしておしゃべりとテレビ観賞が、毎日その狭い空間で繰り返されている。徒歩15分のところにあるミルジャプールの商店街や定期市へ出かけることすらほとんどない。彼女たち女性から「買い物」といった楽しみをとったら一体何が残るのであろうか、どこで買い物をするのであろうか、というのが積年の謎であった。しかし、何度も現地入りするにつれて徐々にその謎が解けてきた。その一つに「行商人」の存在が大きい。彼らがバリ（屋敷地）まで訪問販売してくれるから、居ながらにして値切りを楽しめるわけである。写真6は調査中に入り込んできたおもちゃ売りの行商人である。その他、女性が買い物する場としては祭

【写真6】おもちゃ売り行商人（2004.9.3撮影）

【写真7】赤ちゃん誕生（2004.9.3撮影）

礼市、夜市などがあり、その詳細については拙書『インド・いちば・フィールドワーク』ナカニシヤ出版（2006.1）で触れておいた。ご笑覧いただければ幸いである。

そんな中で彼女たちが楽しみにしているのは出産のための里帰り、親戚の冠婚葬祭への出席である。かなり遠

距離へ、かつ長期間滞在できるからである。そして訪問先でのケアがしっかりしているからでもある。これも調査中の出来事であるが、奥さん達数人と雑談中に、産婆さんの話になり、「そういう人がいないではないが、私たちもするんですよ、実は昨晩も」といい、隣の小屋を指さし、8時間前に生まれたばかりの赤ちゃんを抱いた若奥さんを連れ出して来た（写真7）。

私は日本の近世・近代村落史が専門であるが、その時代にタイムトラベルできないもどかしさがある。南アジアの農村に入るのは、なんとか当時の日本を実感したいためでもある。屋敷地という空間で誕生し、結婚し、労働し、葬儀が行われる。そこは近世をも通り越して中世日本の姿ではないか、と思うことさえある。こうした中世と現代が同居する日常のありのままを、私は、ニュース性、事件性に特化させることなく、すなおに記述し伝えることに力を入れていきたい。

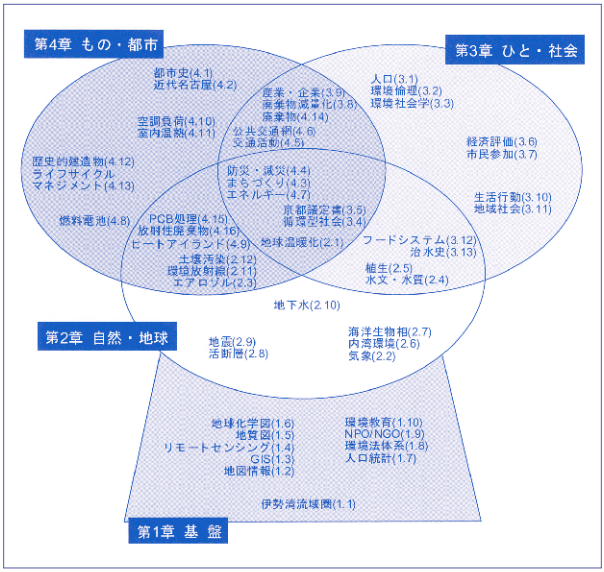
『環境学研究ソースブック』ができるまで

高橋　誠　社会環境学専攻　地理学講座

話は1年半ほど前に遡る。遠い昔の出来事のような気もするし、熱病にうなされた白昼夢のような気もする。記憶は薄れているが、たしか初夏の汗ばむような日だったと思う。いまは亡き増澤敏行先生と、建築学の西澤泰彦先生が2冊の赤い本（増澤敏行編、名大環境学集成2003-3、2004-3）を携えて研究室にやってきた。お二人が持続性学プロジェクトで活躍されていたことは知っていたが、私自身は研究科への貢献にあまり熱心でなく、濃密な時間をともに過ごすことになるとは、このときは思いも寄らなかった。

そのときの増澤先生の話は、それらの赤い本の内容をベースに市販本を出版したいということ、その企画を名大出版会に持ち込んだところ「環境学を育てることに責任を持てない」という理由で断られたこと、しかし別の出版社を探して何とかしたいので手伝って欲しいということだったと思う。逡巡する余地はほとんどなく、私が編集幹事になることはそこで既成事実になった。誘われた本当の理由はよくわからないが、諏訪清陵高校出身の増澤先生に、地理学に対するある種の愛着があったのかもしれない。

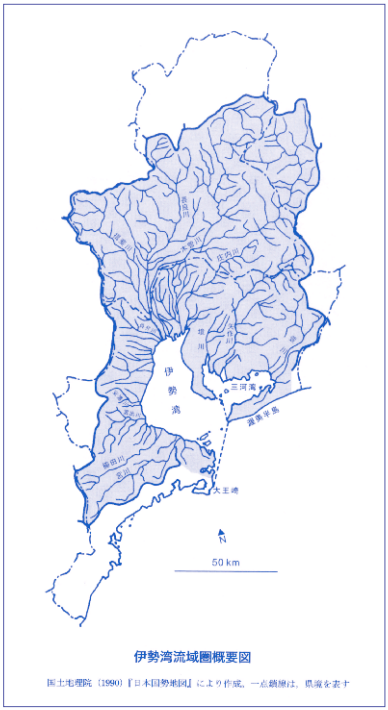
赤い本を市販本に仕上げるのには、いくつかのハードルと心配事があった。まず環境学研究科の持つ枠組みを世に問いたいという増澤先生の情熱は理解できたが、環境学研究科スタッフが初めにあって、それらの研究に関わるデータソースの紹介というコンセプトでは、正直、名大出版会の見解は正鵠を得ていたように思われた。データソースベースを改めてトピック（つまり研究ネタ）ベースにすることと、全体のストーリーを基盤・自然・人・ものの4部構成にすることを、最初に決めた。ただ、いま思うに、環境学の理念や体系について三人で議論した記憶はほとんどない。むしろ、増澤先生のアイディアを具体化する方策について三人で考えた、と言った方が正確かもしれない。



【図1】環境学研究ソースブックの構成概念図

三人の間には、いつの間にか何となく役割分担ができあがっていた。増澤先生はずっと棟梁で、肉体的にも精神的にも辛かったはずだ。私がやったことと言えば、執筆者から送られてくるファイルの管理と、十何年も使っていなかったロットリングの製図ペンを超音波洗浄機で洗ったことぐらいだ。ある意味で、藤原書店との交渉を担当した西澤先生の役回りが、出版の成否にとって最も重要な鍵だった。その交渉の中で生まれた、いくつかのハードルを乗り越える作業が、その年の晩秋にかけて続いた。

最初、仮題として提案された書名は、『伊勢湾とその流入地域の環境ソースブック』だった。クッキングとプログラミングに関するものを除くとほとんど使用されていない「ソースブック」という用語がまず引っかかり、「環境学研究」を付けたらよかろうということになった。



【図2】ロットリングで描いた伊勢湾流域圏

「伊勢湾とその流入地域」というのも、語感の悪さに加え、環境問題のグローバルな広がりに比してあまりにもローカルすぎる印象を与えてしまったようだ。こちらの方は、その後、林良嗣先生の発案で「伊勢湾流入圏」に変わり、最終的にいくつかの政策文書で使われていた「流域圏」という用語に落ち着いた。増澤先生と西澤先生は、その理論的根拠を考えるのに苦心されたが、結局のところ愛知万博によって風が変わった。出版社に「いっそ『名古屋環境学』にしませんか」と言わせるまでになっていた。

実は、藤原書店に（2冊の赤い本と一緒に）持ち込まれた企画書には、71トピック（24コラム）が記載されていた。なるべく多くの執筆者を動員することで、環境学研究科全体での取り組みという意味合いを持たせたい、という希望が増澤先生にあったからである。しかし、2,000円前後という希望価格に対して分厚くなりすぎるという理由で、それはあっさり却下された。最終的に51トピック（14コラム）になったが、これはあくまで私たちが考えた環境学研究の構成と環境学研究科のスタ

ッフの専門との折り合いの結果であり、どうしても必要なトピックだが適当な執筆者がいない場合にかぎり、外部に応援を求めることにした。

編者名の決定も大いに頭を悩ませた。増澤敏行編は売れる見込みがないという理由でご本人が固辞したし、増澤・西澤・高橋編では私たちに何となく衒いと気恥ずかしさがあった。名古屋大環境研究会（名古屋と大との間にポーズが入る）というお笑いのような提案が出るに至って、袋小路に入ってしまったかに思えた。結局、誰が思い付いたのかは忘れてしまったが、最初の趣旨に立ち戻ることであっけなく解決した。

原稿が揃うことについては、私自身は楽観視していた。新しい研究科ができて数年、執筆者のみんなが研究科からの発信を望んでいるに違いない、という確信が何となくあった。もちろん、執筆を依頼する人選には苦心したし、筆の速い人を念頭に置いたのも事実である。実際、数名の辞退者はいたものの、ほぼ全員の原稿が次の年の初めまでに出揃った。むしろ意外だったのは、提出された原稿の体裁、とくに注と文献の書き方が文系と理系との間のみならず、それぞれの中でもバラバラだったことであり、環境学の現状を表すかのように、いくつかについては最後まで統一しきれなかった。

このようにして構想から脱稿までの1年あまりの間で、多いときで週1回のペースで会合が持たれ、三人で交わした電子メールは優に200通を超えた。増澤先生を失ったことは痛恨の極みだが、ここでは多くを語るまい。ともかくも、昨年の12月30日、『環境学研究ソースブック－伊勢湾流域圏の視点から』は世に出た。そんな意識は全くなかったが、図らずも、それは環境学研究科編による図書の第一号となった。原稿執筆や図表・資料作成にご協力をいただいた先生方、研究科長をはじめ、お世話になった多くの方々に、この場を借りてお礼を述べたい。また、数々の非礼に対しては、心よ

りお詫びを申しあげたい。

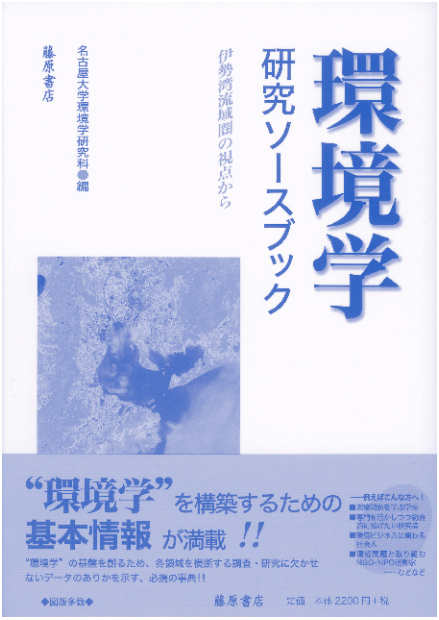
ごく最近、藤原書店から西澤先生に届いた電子メールによると、だいぶ苦戦しているらしい。よい本ができるだろうという自信はあったが、正直に言って、それがマーケットで受け入れられるかということについては最後まで不安が残っていた。いまのところ、残念ながら不安が的中した形になっている。

「環境学」という確固たる学問体系があり、環境問題に対するひとつの処方箋が存在しうるとか、環境問題はグローバルないしナショナルの問題であり、伊勢湾流域圏など関係ないとかと思っている人は、ぜひこの本を読んで欲しい。私たちと自然との関わりは真空の中でなく、まさに現場で起こっているのであり、そうした関わりが世界中で多様であるように、そこで生じる環境問題やその処方箋、そこへの学問的なアプローチも一様ではなかろう。西澤先生は藤原書店の『機』(No.166)における「環境学を構築する基本情報」という文章で、ファッション化する「環境」言説を厳しく批判し、様々な専門領域の知識と経験を突き合わせることでしか、環境問題は総合的に論じられないと述べている。環境学研究科は異種交雑(地理学の流行の言葉を使えばhybridity)のアリーナを提供する。そこで必要とされるものは、ローカルに考えること、そして少しばかりの境界を越える想像力である。

実のところ、出版社からは販売努力を求められている。だからというわけではないが、私自身、来年度のある授業でこの本を教科書として指定し、伊勢湾流域圏を舞台に異種格闘を試みるつもりだ。もし可能ならば、ぜひ教科書や参考書、レポート課題などで活用していただきたい。あるいは、一言、この本の存在に触れていただければありがたい。私自身、最初は懐疑的だったが、出身地も世代も専門分野も異なる人たちとの関わりに次第にのめり込むようになった。私の中の想像力を刺激したからである。その意味で、増澤先生

と西澤先生には衷心より感謝している。

（名古屋大学環境学研究科編『環境学研究ソースブック—伊勢湾流域圏の視点から』藤原書店、2005年、252頁＋口絵8、2,200円＋税、ISBN：4-89434-492-0）



【図3】環境学研究ソースブックの表紙

KWAN「環」創刊後の４年間を顧みて
「変わりゆくエリート教員文化」のなかで

大川睦夫　社会環境学専攻　社会環境規範論講座

1991年に、定年を待たず職を退きました。それはとアウステルリッツは語った。ひとつには蔓延する愚昧がついに大学にまで及んできたことを思い知ったからですけれど、もうひとつは、以前からの念願にしたがって、建築史と文明史についての私の研究を文章に纏められないかと思ったからなのです。

（W.G.Sebald、鈴木仁子訳『アウステルリッツ』白水社、2003年）

【はじめに】

何とか無事退職できそうな目処がついてほっとしたいのに、こんなに雑多な仕事を片付けなければ辞められないのかと溜息をつきながら老骨に鞭打っている日々だ。この後退職する予定の人々に「他山の石」となればいいと思う。

公的な面だけに限って少しだけ書くと、このKWANは別として、名大トピックスの原稿も一時は断ろうかと思った。生協の「かけはし」は丁重にお断りして、退職後に投稿することで勘弁してもらった。「名大日の丸事件」の当事者として叙勲申請は当然お断りした。最終講義という儀式や個人送別会などの好意的な申出も丁重に断った。「老兵は死なず、ただ静かに立ち去るのみ。」在職中は物議を醸したことも一再ではなかったし。

これらは名大を辞めるための仕事だが、他にも私事ではない仕事を抱えている。一つは今年5月3日憲法記念日に長崎で開催される憲法集会の裏方として企画・調整にかなりの時間を割いている。ドイツ国法学の演習で教えたこともあり、今は地元の大学に勤めている教授から頼まれた件なので仕方がない。

二つめの学外の仕事は、この数年来手がけている超ロウカルな天白区相生山の自然保護市民運動だ。5年前に環境学研究科に移ってから、何か自分の職場にふさわしい課題がないかと探した。その結果見つけたのがお膝元の極めて地域的な主題だった。これなら、月に

一回くらいは現地調査に行ける。一部同業者のように全国紙の「赤旗」などに書いたりするより、中日新聞に取り上げてもらう方が私の地道に生きたいという性格に合うし、この地方の人々の関心もひくだろう。

私は、このような地域密着型の問題を伝統法学的な型にはまらずに、自由に追いかけて「学際的」に分析し提言するのが好きだ。この仕事をやったおかげで、動物写真家、ヒメボタル専門家、環境生態学専門家、環境保護活動家、環境カウンセラー、卒論でヒメボタルに取組む才媛の女子学生、動物好きの中学生や小学生とも知り合いになった。

もう一例。去年の憲法記念日には中津川に住む法学部の同級生に講演を頼まれたが断った。そして、私より若い岐阜大学の学部長に代わりを頼んだ。当日は私も同行した。主催者と蕎麦屋で地酒を飲みながら打合せをした。会場では主演者の後に舞台に上がったが「トーク・ショウ」はやらず、20分くらい補足的な噺をして、その後で会場に詰掛けた人々と質疑応答をした。驚いたことに400人は入る会場は超満員だった。

その話を聞いたもう一人の同級生が、また頼みにきた。「2月中旬に、もっと小さな会場でやってくれませんか？」 県内とはいえこれまであまり縁がなかった土地で30人くらいの老人、父母、高校生たちが静かに話合うという。二つ返事で引き受けた。多数の聴衆の拍手を受ける場所で講演することが大好きな学者もいれば、私のように小さな会場で顔つき合わせて話合う方が好きな人も様々にいて、社会環境はバランスを保つことができる。

どっちがいいとかいう話ではない。傲慢か謙虚かということでもない。羞恥心があるとかないとかという話でもない。互いに異なる特色を持つ色んな人々が入り混じって一緒に住んでこそ、人類は地球生態系を破壊し尽くす前に、何とか生き残る路を模索できると思っている。

こんな具合であれやこれやの用件で忙殺されながら、あと少しの我慢だと自分に言い聞かせながら、この文章を書いている。

【KWAN創刊のいきさつ】

KWANは、環境学研究科が独立大学院として発足して1年後に創刊された。ソルトレイク五輪のモウグル競技で上村愛子が6位に入賞し、里谷多英が銅メドゥルに輝いた2ヵ月後の2002年4月だった。この4月には学校週5日制も正式に始まった。

私はさらに2年ほど遡る2000年の秋頃から環境学研究科設立準備会の委員として広報活動の責任者として働き始めていた。当時文部省と折衝した「団子三兄弟」の一人だった黒田達朗さんに、新研究科を成功裡に発足させるためには学内外の広報活動が重要なので、と頼まれれば厭とは言えなかった。

こうして、各研究科（学部）から派遣された教員によって構成された「新研究科設立準備広報委員会」が、2001年4月に正規の「環境学研究科広報委員会」として発足した。初めの頃は他大学に転出する人などもあり、

初代編集長　森博嗣氏の送別会　2005年3月

入れ替わりがあったが、定着した初代の編集委員は、私のほかに阿部理、市川康明、平原靖大、森博嗣の5人だった。出身学部は、工学部、理学部、情報文化学部で、私のほかは助手と助教授という若い世代だった。

自分の学問分野とまったく違う理系の若い人々と一緒に仕事ができることになったことが嬉しかった。生来私は好奇心が強いので、自分が知らない世界で年寄り世代と違う発想で勉強している若い人々から知的な刺激を受けることが楽しみだった。

ところで、初代研究科長に担がれた小川克郎さんは、さすがに一角の人物だった。設立準備のために様々な学部出身者の結束を固めるために企画されたパーティーで初めて会話をした。

埋蔵エネルギ調査に出かけた東南アジアの密林で、前後を警護する兵隊が、猛毒のグリーン・スネイクが上から襲ってくるのに備えて銃の安全装置をはずしていたという話は面白かった。この後でパーティーの終了後10分も経たないうちに、偶然地下鉄で会うとは思わなかった。

車内で、「僕は作曲するんです。」と彼は言った。「ピアノでやるんですか？」と訊くと、「楽器はできません。」との返事に呆れた。「楽器ができなくて、どうやって作曲できるんですか？」。「コンピュータを使ってオーストリア人と共同で作ることもあります。」という話にはついていけなかった。これでは、私の方がずっと年寄りのような逆転したやりとりだ。

でも、こんなに例外的に文化的な話ができる人が私たちの研究科の長と知って、また広報活動に少しは力を入れてもいいと思った。

【KWANの目標】

環境学研究科が発足するまでの半年間は意に反する仕事を沢山やらされた。研究科長が文部省の役人に説明したり、財界の人々と会うときの手土産に、内容は二の次

でいいから見栄えのするパンフレットが欲しいというのだ。必要性は分かっても私が一番嫌いなセイルズマンの仕事だったので、科長の意を体する評議員たちとはしばしば対立した。

私は一匹狼と言えるほど強い人間ではないが、他人と群れることは好きではないので、喧嘩の場にはいつも一人で出かけた。幸い若い広報委員の仲間は私を支えてくれた。「常軌を逸したあんな評議員の言うことに従う必要はありません。」と励ましてくれた助教授もいた。

研究科広報誌の企画に取りかかったのは2001年の秋頃だった。「さあ、いよいよ私たちの出番だ！」と張りきった。私が作った編集方針を叩き台にして、5人でかなり長い時間議論して次のような結論に至った。

情報文化学部、文学部、工学部、理学部からの寄り合いの大所帯の新研究科が統一的な研究・教育組織として名実共に成長、発展するのは容易なことではない。従来の名古屋大学でも、学閥、学部閥、党閥、思想閥がはびこって総合大学の体を成すことに苦労してきたのだから。（1960年代後半に名古屋大学の法哲学者平野秩夫教授が院生だった私に話してくれた言葉だが、今でも変らない真実だと思う。）

それで、さまざまな出身母体のけち臭い「文化」に視野を塞がれてきた教員、職員、院生たちが、互いに率直に激しく議論することにより、本物の知識人として理解を深め、できたばかりの共同体が成長することに役立つ討論の場（Forum）を作るために力を注ぐことにした。

具体的な方法についての議論に移ると、私も初めのうちは疲れを覚えることが少なくなかった。何しろ「新々人類」とも言うべき世代の教員相手だから。初代編集長に内定していた森博嗣さんなどは、「環境のためには紙媒体の広報誌は良くないと思います。Web上だけでいいのでは・・・」とまで言う。流石にこれには、「学外の偉いお年寄りにも読んで貰う為には、やはり雑誌の形でないと・・・」と反論した。

ハノーヴァ近郊の州立シュタットハーゲン校で大川の特別授業を受けた生徒たち　2002年3月

学外への広報、宣伝のための媒体としては、全国あちらこちらの市民図書館や大学関係の図書室ばかりでなく、文化会館など公共施設にも置いてもらわなければならない。という話をしていると、又もや森博嗣さんが、「一々置きに言ったりするのは時間の無駄なので、定型封筒に入るサイズで作りましょう。」と発言し、即座に決まった。

中身がない割にカラーをふんだんに使い、莫大な費用をかける広報誌全盛のなかで、私たちはその反対をめざした。「小さくてもキラッと光る広報誌」が目指す着地点だった。

【果たした役割】

創刊後4年が経つ今顧ると、目標が気宇壮大だっただけに成果は大きくなかったと言わなければならないと思っている。

それでも、創刊号を繙けば溝口常俊の「西のかた陽関をいずれば」、西澤泰彦「専門知識と素人」を始め、力作

が多い。

2号でも辻本誠「『やせ我慢』の記録」など、面白いものが少なくない。こうして幸先良く船出したかに見えた“KWAN“だったが、読者の中には、「なぜ初代広報委員長の大川が自ら“KWAN“にしゃしゃり出ているのだ？」と不愉快に感じた向きもいると思う。

2号には大川睦夫「日本の街路はなぜ快適でないんだろう？」と題して「トヨタの城下町＝名古屋」の都市計画を批判した随筆が載っている。

その後も6号に「壊滅の危機にさらされるヒメボタル棲息地」、8号と9号に「風前の灯火？　ヒメボタルが棲息する相生山緑地の運命」（上・中）を書いた。その後はこれらの小論が自ら招いた「相生山の自然を守る会」の強硬派との紛糾にうんざりして、どうしたものかと思案に暮れていたが、何とか11号の「相生山で『瓢箪から駒が出る?』」で、辛うじて落とし前をつけることができたと思っている。

だが、私は「出しゃ張り」ではない。“KWAN“を1冊出す度に編集部の5人で会食をした。できる限り過激なゲストを迎えて、一回ごとに総括しながら次の企画について話合うことにした。ゲストとして呼ばれたPeter High は「コンクリートは反自然、反環境だ！」と挑発して、森博嗣と深刻な議論となり、私は喜んだ。

このような話し合いのなかで、才能のある寄稿者が見つけられなかったときには自分たちで書こうと提案した。これに応えて最初に平原靖大が書いた「21世紀どまんなかハイテク超省エネ生活」が2号と3号に掲載された。続いて他の編集部員も短い書評を寄稿した。

こうした流れの中で編集委員に、「大川さんも書いてくれませんか？」と言われて引っ込みがつかなくなって書いたのが、私の“KWAN“への最初の寄稿だった。

【話題にならなかった森博嗣氏の随筆】

去年の7月に刊行された10号には、初代編集長を務め

た後、去年の春に勇退した森博嗣の「どこを見ているか」と題する随筆が載っている。本来なら3月の9号に掲載されるはずだったが本人の都合で遅刻した告別原稿だ。

私はこの内容に7～8割方賛同している。流石に、これから筆一本で生きていこうという人の文章だ。

実は、私も1990年後半までには勇退してギリシアの島に住もうなどと大それたことを考えたことがある。このときは、私より若いのに世渡りの知恵に優れた黒田達朗さんが、適切な助言をしてくれたので大きな危険を冒すことを断念して良かったんじゃないかと感謝している。

だから、私は洞察力、文才、気力と体力に恵まれた森さんが羨ましい。結局定年まで便々と教授職にしがみついて過ごしたことに忸怩たる思いだ。

似たように考えている同僚も少なくはないと信じているが、森さんの随筆が波紋を広げることなく、話題にもあまりならないように見えることに、私は失望している。偶々私が直接に感想を聞いたのは、管理職の教授と理系の助手の二人だけだが、いずれもやや否定的な結論で予想の範囲内だった。

本来なら、文部科学省主導の大学改革に賛成する人も批判的な人も、森博嗣の問題提起について大いに率直かつ真剣に議論すべきだと思う。多忙化が加速する職場の流れに掉さして、あるいは渋々であろうと、「走りながら考える」ことさえ難しい状況のなかで、同僚の短い文章さえ読む余裕がないのだとしたら、何をか言わんや。

【これからのために】

こんな知的雰囲気に乏しい職場で、“KWAN“の創刊当時の理念が実現される見込みは薄い。だから、この4月から現在の西澤泰彦編集長の跡を襲う新編集長は指導力を発揮して、4年前の理念が現在でも通用するのかどうか、是非再検討してほしい。その結果、改革推進派が望むようなまったく新しい刊行理念が打ち立てられて

来日したシュタットハーゲン校の教員が参加した情報文化学部の授業　2004年10月

も、私は今更腹を立てることはない。

だが、もしも創刊以来の古い理念が維持されるのなら、「後家の一念」と言われることを恐れずに頑張ってほしい。「一粒の麦地に落ちずば・・・」の高邁な精神で。

最後に蛇足として、極めて現実的なことを二、三記しておきたい。

すでに述べたように、“KWAN“の現在の寸法は定型封筒にぎりぎり入ることを念頭に決められた。だが、最近庶務掛で確かめたところ、4年前に作られたロウゴウ入りの専用の定型封筒が大量に倉庫に眠っていることが分かった。私たちの思いつきは良かったが、実行する人手がなかったので、アイディア倒れの結果になったわけだ。だとすれば、新編集委員会で新しいサイズについて検討してはどうだろう。

私個人は岩波ブックレットや生協発行の季刊『読書のいずみ』の寸法がいいと思う。そうすれば、今よりは写真や図表を使ってレイアウトを工夫する余地が大きくなる。間違っても今流行りのA4サイズだけは避けてほし

い。あれは見栄えはいいが、大きすぎて鞄に入れて持ち歩く気にならない。

それから、表紙以外にもカラー印刷できるよう刊行予算を増やすよう希望する。これが実現すれば、現在よりは見栄えも良くなり改革推進派も喜ぶだろう。

〈付記〉

この小論を書くために竹内洋『教養主義の没落 変わりゆくエリート学生文化』中公新書、2003年、を参考にした。学生論としてではなく、教員論に置き換えて読んだことは言うまでもない。

退職にあたって〈阪神淡路大震災の衝撃〉

藤井直之　地震火山・防災研究センター

彦根で震度が5とテレビにでた。1995年1月17日の午前5時47分頃、徹夜明けでやっと寝床につこうとしてテレビを消す直前だった。名古屋での揺れは震度が2～3だとすると、震源はどの辺だろうか？「まさか有馬ー高槻線が動いたのでは？」、というのが阪神淡路大震災の情報を知ったときの第一感であった。こちらから芦屋の家族に連絡しようとした矢先に、先方から電話がかかってきた。「近くで飛行機が落ちたようなガーンという音がして、ベッドから投げ出されたけど、娘も私も大丈夫。外は真っ暗で何も見えない。これから関東の母方に連絡する。」という内容だった。これは関西近辺での大地震だ、と分かって取る物も取り敢えずすぐ大学に向かったのだった。大学につく6時20分頃までの間、真冬の明け方の空が明るくなって行く様子をつぶさに見たのは名古屋に来て初めてのことだった。

「名古屋に行ったら、地震発生や火山噴火等のイベントでゆっくりする暇がなくなるぞ」、と言われたことが思い出された。神戸大にいた頃に毎日のように高架下を通っていた高速道路が横倒しに倒れるなんて、想像もしていなかった。関西ではジャーナリズム関連の人から「関西には地震が少ないですよね」と質問されたら、「確かに有感地震は少ないけれど、過去には被害地震がかなり有ったのですよ。慶長年間の有馬の地震とか。」という返事をしていたものであった。しかし、被害の程度がどれ程かについては、ボク自身も具体的には想像できていなかった。まして、阪神近傍で6400人余りの人命が失われる事になるとは、全く予想していなかった。この阪神淡路大震災を契機にボクの関心事は否応なく防災／減災の割合が大きくなった。

思えば、豊田講堂の前に広がる「緑の芝生」が印象的な名大に移ってきたのは15年前の1991年4月であった。この年は湾岸戦争、そしてベルリンの壁の消失に始まったソビエト連邦の崩壊の第二幕、保守派共産主義者によるクーデター未遂事件とエリツイン大統領の就任、と激

崩れた国道43号岩屋高架橋から落ちたトラック（撮影者:前田耕作:神戸大学附属図書館「震災文庫」提供）

変する世界の始まりでもあったように思う。身近なこととしては、着任早々、前年から騒がしくなっていた雲仙普賢岳から『火砕流らしきもの』がでたことだ。その直後の6月3日には、四十数名の主として報道関係者の命が奪われる災害となった。有名になった火砕流の災害はその後4年も続いた。それからは激動の15年、実にいろいろな出来事に出会った。地震火山に関して思い出すと、忘れ去られがちな1993年7月の北海道南西沖地震（通称は奥尻島の地震）では、津波で200人以上の命が奪われた。そして、1995年の阪神淡路大震災、2000年の有珠山と三宅島の噴火、2004年12月のスマトラ島沖地震津波災害など、枚挙にいとまがない程だ。寺田寅彦は「災害は忘れた頃にやってくる」という意味のことを言ったが、ボクにとっては「災害は忘れないうちにやってくる」のだ。しかし、「知識として知っているだけでは忘れたも同然、災害の程度をイメージできること」が習慣として身に付いている必要があると痛感した。そのためには、常日頃に訓練しておくことが肝心なのだと思い知らされた。

自然の出来事ばかりでなく、大学という組織も教養部の解体や大学院重点化、そして法人化というように戦

後60年以来の大変革が起きた。それに呼応するように、阪神淡路大震災を契機に自然災害において専門家と一般の人々との関係も大きく変化した。それまで、「想定される東海地震」に対して地震対策強化地域では、全ての地震防災対策が「警戒宣言が発令されることを前提」としていたために、突然の地震災害には全く役に立たない対策しかなされていないと多くの地震に関わる専門家の批判を浴びていた。阪神淡路大震災は、大規模地震災害対策法（いわゆる大震法）が想定していた東海地震ではなかったが、これを契機に、予知がなされずに突然に地震災害に見舞われた場合への防災対策に重点が置かれるように変わりつつあるのは喜ばしいことである。とくに、2001年11月に政府による『東海地震の見直し』を受けて、新たに地震防災対策強化地域に指定された名古屋市をはじめとする東海の多くの地域では、警戒宣言が発令されることなく突然地震災害が発生することが多いのだ、という認識が広まってきた。地震予知に関わる研究者が長年にわたって埋めようと努力してきた「地震予知に関する社会の認識とのギャップ」が、少なくとも東海地域ではほぼ解消しつつあると思える状況となった。もっとも、分かり易く物事の本質を伝えることは、いつまでも難しい課題ではあるが。

「相生山の自然を守る会」が教えてくれた事 『KWAN環』11号掲載の大川教授執筆エセイに対して

小川千絵子　相生山の自然を守る会会員

週末の夜はディスコか合コンがお約束・多くの女の子がブランド品を持ち始めて「なんとなくクリスタル」がベストセラーになった時代に大学生活を送った。

音楽は、「反戦ソング」や「四畳半フォーク」に替わって、ユーミンや達郎の「ニューミュージック」や「クロスオーバー」。

「ノンポリ」は「のんびりぼんやり」のことで、「アジ」はアッシー君をしてくれるオジサンのことだと、思っていた。「デモ」と聞けば、「ああ、実演販売ね。」

こんなかる～イ人が主婦になったから、やはり関心事はグルメとファッション。

「楽しくないことや、おしゃれじゃないことは、いや。」と言っていた私なのに・・・

まさかまさか、道路反対運動をしてしまうなんて！暑い夏に汗だくになりながら、相生山の中を歩き回るなんて。マイクを片手に「相生山に道路はいらんがね」と叫んでしまうなんて。

それもこれも、全ては、相生山を自分の子どもに残してやりたいという気持ちから。

「守る会」の仲間のおじいちゃんは、「反対しないでいたら、あの戦争になっていた。相生山に道路ができて『あの時アンタはなんで反対しなかった』と言われたら、後の世代に申し訳ない」といって、いつも来てくれる。3児の母のSさんは、仕事を持っているけれど、ホタルの時期は殆ど毎晩山の中に入って観察をしている。持病を持っているFさんや片道30分以上かけて遠くから来てくれるNさんも、みんなみんな、相生山の自然を守るために自分の生活の一部を使っている。

今も、「相生山の自然を守る会」の活動は続いている。運営委員会・「歩こう会」という「自然観察会」は毎月定

例で開催している。（どちらの場でも、一度も大川教授を見かけたことがないのが、残念だけれど。）

ごくごくフツーの人たちが、ただただ、「名古屋の片隅に残された123. 4haの自然を残したい」という気持ちで集まっている。有名人もいないし、資金もない。素人の集まりだから、思いつくことは「時代にそぐわない古臭い手法」（大川教授p44）だったかもしれない。この方法では、「世論を盛り上げることは難しい」（同）のかもしれない。もっと上手にやれたのかもしれない。
けれど、それなら、大川教授にはもっと素晴らしい方法を提案して欲しかったな。
（ついでに言うと、「万博に絡めて・・・（同45）」を取り上げなかったのは、エネルギーが無かったからじゃなくて、その案自体あんまり魅力的とは思えなかったからなの。）

大きな組織の前では、私たちフツーのおじさんやおばさんの声はホントにホントに小さい。その声が大きな声になることはないかもしれない。それでも、声をあげていく事は大切だという事を「守る会」の運動を通して知った。

「声の上げ方が悪いから失敗したのだ。」と、声をあげた人を批判するのは簡単な事。けれど、声のあげかたの是非ではなく、その声を取り上げなかった社会に問題があるんじゃないかしら。この現代社会の問題点こそ、分析研究していただきたいなあ。

《広報委員会からの追記》

『KWAN環』11号、35～50頁掲載の大川睦夫「相生山で『瓢箪から駒が出る』？－転機を迎えた緑地保護活動に関する同時進行的研究備忘録」に対して、「相生山の

自然を守る会」から、「書かれたことと事実との違い」がある旨の抗議と、同会の活動についてはそのホームページ（http://www.geocities.co.jp/NatureLand/3513/）を参照されたいとの要望が寄せられたことを記します。（広報委員会『KWAN環』編集担当）

事務部の窓

【DATA BOX】

○ 国費・私費別の外国人留学生数

（平成17年11月1日現在）

課程・学年		博士課程前期課程		博士課程後期課程			大学院研究生等	計
専攻名	種別	1年	2年	1年	2年	3年		
地球環境科学専攻	国費	1		3	5	6		15
	私費	1	1	1	2	4		9
都市環境学専攻	国費		2	1	2	3	2	10
	私費	5	4	4	2	5	3	23
社会環境学専攻	国費				2	3		5
	私費	2	2			4	1	9
計	国費	1	2	4	9	12	2	30
	私費	8	7	5	4	13	4	41

○ 国・地域別外国人留学生の在籍数

（平成17年11月1日現在）

国・地域		課程学生	研究生等	計
アジア	中国	31 (19)	4 (3)	35 (22)
	韓国	12 (4)		12 (4)
	インド	4 (1)	1 (1)	5 (2)
	インドネシア	2 (0)		2 (0)
	カンボジア	1 (0)		1 (0)
	ネパール	2 (0)		2 (0)
	バングラデシュ	1 (0)		1 (0)
	ミャンマー	1 (0)		1 (0)
	モンゴル	1 (1)		1 (1)
	ベトナム	4 (1)		4 (1)
	台湾	1 (1)		1 (1)

中近東	イラン	1(0)		1(0)
	トルコ	1(1)		1(1)
アフリカ	スーダン	1(0)		1(0)
ヨーロッパ	ウクライナ	1(1)		1(1)
	ポーランド	1(0)	1(1)	2(1)
合計		65(29)	6(5)	71(34)

( )は女子を内数で示す。

○社会人特別選抜による入学者の在籍数

(平成17年11月1日現在)

課程・学年 専攻名	博士課程 前期課程		博士課程 後期課程			計
	1年	2年	1年	2年	3年	
地球環境科学専攻					1(1)	1(1)
都市環境学専攻			5(0)	6(1)	1(0)	12(1)
社会環境学専攻		3(1)	3(0)	1(0)	6(4)	13(5)
計		3(1)	8(0)	7(1)	8(5)	26(7)

( )は女子を内数で示す。

【教職員の異動】(平成17年12月16日～平成18年3月31日)

○定年退職

H18. 3.31　松原輝男　都市環境学専攻物質環境構造学講座教授

H18. 3.31　杉本　隆　都市環境学専攻物質環境構造学講座教授

H18. 3.31　大川睦夫　社会環境学専攻社会環境規範論講座教授

H18. 3.31	板倉達文	社会環境学専攻社会学講座教授
H18. 3.31	藤井直之	附属地震火山・防災研究センター教授
H18. 3.31	近藤延代	環境学研究科・地球水循環研究センター庶務掛長

○退　職

H17.12.31	酒井　哲	大学院環境学研究科COE研究員
H18. 3.31	森杉雅史	都市環境学専攻地圏空間環境学講座助手（名城大学都市情報学部助教授へ）
H18. 3.31	有賀　隆	都市環境学専攻環境・安全マネジメント講座助教授（早稲田大学理工学部教授へ）
H18. 3.31	吉永美香	都市環境学専攻建築・環境デザイン講座助手（名城大学理工学部講師へ）

○採　用

H18. 1. 1	堀　正岳	大学院環境学研究科COE研究員
H18. 1. 1	盧　学強	大学院環境学研究科COE研究員
H18. 2. 1	長尾征洋	都市環境学専攻環境機能物質学講座助手

○昇　任

H18. 2. 1	柴田　隆	地球環境科学専攻気候科学講座教授（地球環境科学専攻気候科学講座助教授から）

＜原稿募集＞

本誌は名古屋大学環境学研究科の広報誌ですが、内部外部を問わず原稿を広く募集しています。「環境」をキーワードにしたものであれば、内容は問いません。文字数は 1,500 字～ 8,000 字とし、長い原稿は連載として掲載します。執筆ご希望の方は、最寄の広報委員へご相談いただくか、下記メールアドレスまでお知らせください。

名古屋大学大学院環境学研究科広報委員会
荒川政彦・岩松将一・木股文昭・柴田　隆
田渕六郎・玉樹智文・西澤泰彦・服部久子
koho@env.nagoya-u.ac.jp

＜編集後記＞

『KWAN』の編集担当となり、この 2 年間は、さまざまな専門分野の方々がいる環境学研究科の姿がわかる広報誌を目指してきました。今後もより多くの方々が原稿を執筆していただくことを希望しています。

（西澤泰彦記）

KWAN「環」12 号
名古屋大学大学院環境学研究科広報委員会
2006 年 3 月発行
http://www.env.nagoya-u.ac.jp

Nagoya University Graduate School of Environmental Studies